余話　　イヌワシとカラス

題から連想される場面は、イヌワシとカラスの空中戦かも知れない。それも全く当っていないこともない。しかし、一般に見かける大空での戦いは鳶とカラスの争いが圧倒的に多い。イヌワシは日本では天然記念物に指定され、個体数が極めて少ないから争いの場面は確認しにくいし、空中戦の現場を見る場面も少ないのである。

坂下町に赴任していた時、いきなり町内の公民館に電話で呼び出された。協議題も確認しないまま出席してみると、十四、五人の人々が集っていて既に大声で話は始まっていた。始めのうちは何のことやら解らなかったが、「イヌ」とか「トリ」という言葉が頻繁に出てきた。野鳥に興味のない教員がこのような会議に出ても発言の切っ掛けさえもない。だが、公職の立場にあるものが話し合いに出席していたとなれば当事者にとっては何となく形にはなる。要は「枯れ木の賑わい」なのだ。

よくよく話を聴いてみると、「イヌワシが自分たちの仕事場の近くに巣を作り雛を育てているのが確認できた」と云う、野鳥を愛する会の人々と林業を生業（なりわい）としている人々との議論であった。南会津町の昭和村からは会津坂下町には近道で抜ける林道があり、その峠の

頂上近くに博士山という岩山がある。この岩山の中ほどにイヌワシが営巣したらしい。話によると営巣は今年が初めてではない。ところが今年の場所は、伐採の予定されている杉林は、イヌワシの巣の直下に当るという。現在の伐採はチェンソーで伐るために音が大きく、さらに、切り倒した木材を運び出すための道路を作る必要もある。イヌワシが驚いて逃げ出さないとは限らない。と野鳥の会の人たちは主張する。一方永年営林署の仕事をしてきた人たちは、仕事が出来なければ死活問題だとやり返す。話に新案はなく堂々巡りである。私は立場上の同席であったし、幸か不幸か野鳥の知識も無かったので聞き役専門であった。しかし、話はどちらの意見も正しく聞こえるので困った。

ところで、ここには肉食の野獣といわれる熊も狐も狸も貂(てん)もいる。しかし、これらは直角にも近い崖を登ることは出来ない。イヌワシにとって最も恐ろしい存在は、カラスの群れかも知れない。親鳥が巣を留守にしている間に卵や雛を狙うのである。このあたりに棲むカラスは嘴細(はしぼそ)ガラスと云われ、人家近くに多くいるが「がぁがぁ」と濁った声で鳴き続けるので嫌がられている。しかも、この群れは複数あるいは集団で獲物を襲うが、自分の雛が居る時には人間にさ

え攻撃を仕掛ける。この行為は子を持った野生動物の本能でもあるのだが、音も無く急降下し後から襲うので恐ろしい。カラスが鳶と空中戦を繰り広げるのもこの時期である。鋭い爪と嘴をもった大型の鳶がカラスに追い回される様子は様にならないが、相手が集団となると話は別である。カラスの方は爆撃機を狙う戦闘機よろしく機敏に動く。別々のカラスが仕掛けては逃げる行為を飽きずに行うのである。弁慶と牛若丸ではないが、飛翔力では勝る鳶もやがては疲れ果て戦列離脱となる。カラスという野鳥は工夫という能力を備えている。胡桃（くるみ）の実を道路に置いて車に轢かせ、中味を食べるという行動はよく見かけるし、長く飼われたカラスは人間のことばを上手に真似てしゃべる。

ところが、鳥の中でも優れ者のこのカラスは人間に好かれない。これは全身が喪服に似た黒色というだけではないと思われる。古来、日本人の喪服は白であったからである。今でも葬儀で読経する僧の衣は黒とは限らない。日本人が葬祭に黒の喪服を着るようになったのは明治維新からだという人もいる。思いつきではないが、カラスは日本の何処にでもいる鳥だからではあるまいか。例えの良し悪しはお許し頂くとして、朱鷺（とき）とカラスの数が逆転していたとしたら、

少なくない人々はカラスを保護鳥にしたであろう。「七ッの子」は森から出て大威張りで飛び回り、人々は「今日カラスを見たよ」などと話題にするだろう。話は飛躍するが、ダイヤモンドや宝石のルビーが高価なのも、ゴッホの絵やムンクの絵に高値がつくのも希少価値以外のなにものでもなく、厳重な金庫に仕舞い込んで一人でニヤリとする自己満足なのではないのか。

話は脱線してしまった。イヌワシの話に戻そう。イヌワシと木材の伐採の話はどのように進展したであろうか。幕切れは何とも呆気なかった。それまでどちらに軍配を上げるのか聞き耳を立てていた一同に、営林署の所長の一言は説得力があったのである。

この署長は作業員と同じ服装で参加していて、それまで話の内容には関心がないかのように無口であった。訥々とした話の要旨は次のようなものであった。「私はあと三年で停年なんですよ。会津地区は全国でも守備範囲が広いから、私はここで停年を迎えることになるでしょう。イヌワシは自分が作った巣を三年しか使わないと云われています。どうでしょう？　イヌワシの雛が育つまで一ヶ月と少し、木の伐り出しは中断とすることにしませんか。その間は手鎌で下草刈や道路の下作りをすることにしましょう。県や国から役人が

何か云って来るかも知れませんが、私の残りはあと三年です。彼らと渡り合って果てても失うものはありません。イヌワシと一緒にさよならです。少々理屈っぽくなりますが、イヌワシだけが貴重で尊いというわけではありません。世の中のものはすべて必要なもので、しかも、生きとし生きるものは一体のものです。勿論、木や草も例外ではありません。「絶対」とは「対を絶つ」ことであって尊徳が云う「一円一元説」(一円融合論ともいう)ほすでにこのことに到達していたのです。イヌワシ論も伐採論も持論に縛られ、皆さんは真の自由を自ら失っているように思えます。何か不都合なことが起ったら、私が責任をとりますからご安心ください」この一言に反対は全くなく、異論を挟む人も誰一人としていなかった。

私は話を聴いてふと寒山・拾得を連想した。論理や筋立てが通っていたばかりではない。人間が齢に応じて身に付けるべき深さを感じたからである。この人は根っからの会津人だった。やがて、茶のみ茶碗はぐい飲みの器に早変わりし、談笑の場となった。一人が「署長は事務所でも現場でも冗談ばかり云っているんで、みんなは人生(みち)を間違えたんじゃあないのか、などと云っているが、今日の堅い話といつもの署長とどっちが本物なんですか?」と云った者がいた。

すると署長は笑いながら「確かに人生（みち）を間違えたかも知れないナ・・・今夜の話はただの思いつきだったからナ」と高笑いした。

署長は見事にとりを取ったのである。